

＜目次＞

1 P	カナリヤの記事と近況報告	元サマナ
3 P	転載－中沢新一氏の手紙	
7 P	嘘発見器	元サマナ
8 P	宮城刑務所だより	その2 元サマナ

カナリヤの記事と近況報告

カナリヤの137号の記事を拝見しました。

「日本脱カルト協会」が法務大臣に宛てた「声名」の中で、

12人が実行犯となった要因として

① 教祖松本による巧みな心理操作のテクニックを集積して体系的に使ったマインド・コントロールのメカニズム

② LSDや覚せい剤まで使った洗脳
を挙げていました。

この①②の主張が正しいとすると、（私を含め）事件に直接関わっていなかった者も、「自分たちは教団のマインドコントロールされた被害者だ」と主張することが出来ます。

そして、（間接的とは云え）教団を支えてきたことからくる罪の意識を軽減することが出来るという点ではとても歓迎すべき理論だと思います。

しかし、教祖が弟子を手なずけ、犯罪に手を染めるに至った行動は、どちらかという
と行き当たりばったり感が目立ち、古参の幹部に事件に手を染めた際に用いた手法として、

<< 巧みな心理操作のテクニックを集積して体系的

に使ったマインド・コントロール>>

が使われた主張するのはのかなり無理があると思えてなりません。

また、私の知る限り、坂本弁護士の事件を初めとする教団初期における一連の事件において、②は使われていません。

今回の事件に限らず、<<死刑>>を宣告されるほどの事件においては、その1つ1つにおいて<<解明>>されるべき点が多々存在しており、それを理由に死刑を取り消してしまうと、ほとんどの死刑判決が取り消されてしまう前例を作ることになりかねません。(長くなってしまうので死刑判決の是非はここでは問いません。)

勿論、実行犯たちに同情すべき余地は多々存在すると思います。しかし、①②を理由に死刑判決を覆すのはちょっと厳しいのではというのが印象でした。

先日、ショッキングなことがありました。
家内とオウム話題になったとき、

彼女は松本智津夫という人物をテレビで初めて見たときから、

「こいつは胡散臭いやつ」

という印象をもったとのことでした。

松本の書籍を読んで魂が震えるほどの感動をしてしまった私と、一見しただけで松本の胡散臭さを見抜いてしまった(どちらかと言うと平凡な)家内。。。

どちらの方が前世からのカルマが悪く、
どちらの方が精神的ステージが高いか！

この現実を受け入れなくてはならなかったのが、
最近のちょっとつらい出来事でした(苦笑)

P S

9月23日に行なわれた大阪で開かれたカナリヤの会に久しぶりに参加しました。
今回は主催者の人徳(!?)のためか、多くの方が集まり、とても楽しいひと時を過ごすことができました。

翌日、用事があったため、途中で帰らなくてはならなくて残念でした。

笑い話を書くことになっていた人はちゃんと記事を書いたかな??

また、お会いできることを楽しみにしています。

元 サ マ ナ

「中沢新一氏の手紙一転載」

以下、信者さんへの中沢新一氏の手紙を転載します。

氏の趣旨からして、転載することは許されるだろうと思いました。

窓 口

『オウム真理教信者への手紙』 中沢 新一

——「週刊プレイボーイ」*95年5月30日号 p.45～48

オウムという教団が日本から消滅した時、生きる意味を知ろうとした信者の〈魂〉の問題はどうなるのか。「帰ってらっしゃい」という“説得”どおりに家に戻るだけか。「ひとりで歩め」。中沢氏はそう呼びかける。学者や研究者としてではなく、彼らと同じように〈魂〉を、〈真理〉を追い求めたものとして。

オウムの中の「聖なる狂気」

私が、あなた方のグル(導師)麻原彰晃氏とはじめて会ったのは、1989年のことでした。雑誌の対談でした。

その当時、オウム真理教は坂本弁護士一家の失踪に関わりがあるのではという疑惑のさなかにあり、マスコミのバッシングもはじまっていました。思えば、その事件あたりから、その後、あなた方の教団が体験し続けなければならなかった、日本社会とのはげしい不調和が、はじまったのでした。

はじめて会った麻原さんは、とてもゆったりした感じで、どちらかといえば、私のほうが緊張ぎみだったかも知れません。私はもともと「超能力」などというものが、魂の深化にとって、どれほどの意味をもつのか、きわめて懐疑的な人間ですし、私のチベットのグルたちも、そんなものにたいした価値をおいていませんでしたので、「超能力者」としての麻原さんの世間への押し出しの仕方には、あまり共感をいだいていませんでした。ところが、話をしているうちに、この「最終解脱者」を自称している人物が、並々ならぬ知性の持ち主であることに、私は気づくことになったのです。

私はいままで、何人もの現代の宗教家と話をすることがありますが、「聖なる狂気(デヴァイン・マッドネス)」という言葉を出したとたんに、あれほどすばやい反応と正確な理解をしめたのは麻原さんがはじめてでした。

この言葉は、宗教の本質に触れているものです。人間のなかには、社会の常識によって囲い込まれた、狭い枠を破っていこうとする衝動がひそんでいます。より高いもの、より純粋なもの、より自由なものに向かっていこうとする衝動です。その衝動を、現実の世界の中で実現しようとするれば、まずは社会の常識と衝突することになります。たいがいの人は、そこで妥協する方向を選びます。ところが、宗教者というのは、そういう妥協を拒否してまでも、自分の魂の衝動に忠実に生きていきたいと願う、変わり者のこと

を言うのです。

麻原さんは、日本人の宗教に欠けているものは、そういう反逆のスピリットなのだ、と強調しました。そのときの麻原さんは、宗教家というよりも、革命家のような口調でしたが、私はそのとき、ああ、これで現代日本にもラジニーシ（インド生まれの宗教家。渡米し、世界規模で弟子を集めるが、国外退去を命じられる。90年、死亡）のようなタイプのラジカルな宗教家が、はじめて出現することになったのだな、この人はなにか新しいことをしでかす可能性を持った人かも知れないな、と思ったのです。

そういう感じをいだいたのは、私だけではありませんでした。90年代のはじめ、何人かの宗教学者が、オウム真理教になにがしかの可能性を見ようとしたことは、事実なのです。私はその理由がどういうものか、だいたいわかっています。

日本の新興宗教には、ふつう教祖様というのがいます。この教祖様が、ときにはイエスや仏陀の生まれ変わりであったりすることもあります。たいがいは特殊な能力をつうじて神や仏のあいだを仲立ちして、その意志や考えを信者に伝えるという役目を果たしています。神がいて、ふつうの信者がいて、そのあいだを教祖様が仲立ちするという、この仕組みは、シャーマニズム（超能力者を仲立ちにして神の意志を聞くタイプの宗教）の構造とそっくりです。

そのために、そういうできあがりをした日本の信仰宗教は、現実の日本社会の中にうまく自分の居場所を見つかることができます。なぜって、天皇制や会社組織をみてみればわかるように、日本の社会全体がそういう構造をしていますからね。

「日本型社会」への批判、そして変質・・・

ところが、オウム真理教ははじめ、そういうシャーマニズムの構造を否定しようとしていました。たしかに、そこにも麻原彰晃という教祖様はいますが、彼はあくまでも、理想としてはグルであって、もともと信者とシヴァ大神を仲立ちしてくれるような人ではなかったはずなのです。

この教団の特徴は、信者の一人一人が修行をすることによって、真理であるシヴァ大神と直接に一体になることをめざしたことにありました。シャーマンである教祖様をあげるのではなく、修行者一人一人が真理そのものを体験していこうとしていた。これはやはり新しいことであつた、と思います。

それを実現してくれるオウム真理教の修行のやり方が、はたして正しいものであったかどうか、私には言いたいことは山ほどあるのですが、いまはあえてそれは問いません。それよりも、日本社会を煮詰めたような宗教教団なるものにおいて、もっとも日本的ななりたちをもった宗教の構造を、大胆に否定しようとする運動をオウム真理教がはじめようとしたことのほうが、重要だと私は思います。

あなた方に、今日浴びせられている恐るべき悪罵中傷を全力でかきわけてでも、私はこの事実を確認します。あなた方は、なにかの可能性をもっていた人々なのです。オウム真理教は、日本社会の仕組みを逆なでするようなことを、あえて企てていたので、すから、いろいろなところで社会とのあつれきをおこすのも無理もないことだ、と私は思っていました。しかし、それはあなた方の教団が、シャーマニズムの構造におちこまないような努力を続けたときにだけ言えることです。

ところがもしも、オウム真理教のような日本社会へのラジカルな批判性をもった集団が、自分の内部に、日本の国家によく似た権力の構造をつくりだそうとしてしまったら、その瞬間から、すべてがとんでもない方向に変化をおこしはじめるだろうということは、たやすく想像がつきます。

あなた方は、ほんものの「自己」を発見するために、日本社会の常識の枠を超え出ようとしていました。それだけで、もうそこには反社会性への芽が芽吹くことになりますが、あなた方が日本社会と同じ仕組みにおちいらない努力をつづけているかぎり、あなた方の存在は日本社会への批判たりえても、敵対することにはならなかったでしょう。ふたつの違う構造をしたものは、たがいに敵対することはできませんからね。

ところが、もしもその集団が、日本的なシャーマニズムの構造への変質をとげたとしたら、どういうことがおこるでしょう。その集団は、煮詰められたミニチュアの日本になってしまうことによって、批判力を失い、そのかわりに敵対関係のほうだけはどんどん先鋭化していく事になるでしょう。

そして、オウム真理教には、そういうことがじっさいにおこってしまったのだ、と思います。あなた方の教団は、ここ数年の間に、ますますシャーマニズムの構造に、おちこんでいくようになってしまいました。あの日本国家を模した省庁の機構に、それがよくしめされています。

そこでは、グルは法皇になり、誇り高いはずの修行者は、みじめな臣民になってしまっています。もちろん一人一人の修行者は、個人の修行のレベルでは、ヨーガの神秘体験をとおして、本来の「自己」をとりもどそうと一生懸命に努力を続けていましたが、それを包み込むオウム真理教そのものは、グロテスクで巨大なミニチュアの日本に姿を変えてしまっていたのではないのでしょうか。そしてその時、批判性は敵対関係に姿を変え、宇宙との豊かな魂のつながりを説く教えは、ルサンチマン（恨み）にみちた暗く貧しい黙示録の想像力によってかわられるようになってしまったのではないのでしょうか。

「ひとり」で歩きだそう。誇りを胸に・・・

いま、あなた方を取り巻いている状況は、これ以上悪いものもない、と思われるほどにひどいものです。修行者に向かって「あなた方はマインド・コントロールされている」というのもずいぶん失礼な話だと思いますが、そんな失礼が堂々と大手を振っておこなわれても、誰もなんにも言えないほど、あなた方を取り巻く状況は最悪です。テレビの

画面から、あなた方に「もどっていらっしゃい」という優しい思いやりにみちた呼びかけが、繰り返されています。でも、どこへ？ あなた方は、一体どこへ戻ってほしいというのでしょうか。

家庭にもどって、もう宗教なんていうあぶないものから足を洗って、人間の霊性がどうか、文明がどうのなんてことを考えつめたりするのをやめて、ただまわりのみんながやっているような無難な生き方をしていけばよいのでしょうか。もちろん、それも可能でしょう。でも、いちど霊性や真理の追究に心を開こうとしたあなたが、そういう生活のなかで幸福になれるとは、私には思えません。だから、あなた方が、オウム真理教にかかわった、そのことのすべてを否定する必要などはない、と私は思うのです。

同じ魂の修行をめざすものとして、私は断言しますが、修行者にもどるところなどはありません。ただ自分を縛っていたもの、自分をだましていたものがあつたとしたら、それを全力で否定し、振り払って、ただ前をみつめて歩いていくことだけが私たちにできることです。そうでなければ、いったん高みをめざした魂は、深い屈辱を味わうことになるだけです。

私のチベット人のグルは、私に教えなければならないことがほぼ終わったとき、私にこう言いました。

「もうこれから先は、おまえが一人でやっていくことだ。いつまでも私に頼ったりしてはいけない。本当のグルはお前の心そのものだ。だから、いつまでも、私のそばにぐずぐずしてはいけない。とっとと、遠くに行きなさい。そして、自分一人の探究を続けなさい。どんなに離れていても、そうすれば、私の心はいつまでもおまえと一緒にだよ」

麻原さんがあなた方に言ってあげなければいけなかったのも、こういう言葉だったのでないでしょうか（ついでに言うと、チベット仏教では人に向かって、「地獄におちるぞ」なんて、おどしたりしませんし、そんなことにおびえたりもしません）。

どんなにすぐれたグルだって、しょせんは一人の人間です。そんなのものにいつまでも執着しては、弟子の魂はいつこうに成長しないでしょうし、また弟子たちを手元に引き止めておこうとばかりするようでは、グルの精神も退化していくばかりです。

あなた方がオウム真理教に入ろうとした動機を、思いおこしてみてください。おそらくあなた方は、自分が本来の「自己」ではないと感じ、自分を育てつくりあげてきたものに疑いを持ち、そして、本来の「自己」にたどりつくために、そうしたのではなかったのでしょうか。それを考えてみれば、親や家族の待つ家庭や社会に帰るかどうかは、それほど重大な問題ではなくなるでしょう。いや、むしろ、いちど、帰ってみるべきかも知れません。

ほんとうの魂の探究者は、苦しみながらも社会のなかで、生きようとするものですし、群衆のなかにいながら、群衆には従うことなく、ただ自分の心にしがって生きること

こそ、自分の魂を成長させる最良の方法だからです。だから、グルからも離れ、たとえ教団からも離れたとしても、あなたの探究が終わりになるわけではなく、むしろそこから、ひとりになったあなた自身の、ほんとうの探究がはじまるのです。

この逆境のなかで、誇りを保ち続けるのはむずかしいことです。しかし、あなた方は、こんな息苦しい現代の中で、魂の真実を求めようとしてきたひとりの人間としての、修行者としての、誇りを持つべきです。そして誇りをもって、自分を縛っている殻を打ち破って下さい。オウム真理教としてはじまった運動にとって、あのグロテスクに肥大した教団の組織は、もともと必要のないものだったのですから。

嘘 発 見 機

オウムについていけないなって感じたのは、いくつかあるけど、一つは、富田俊男さんっていう水を運ぶトラックを運転していた人が、水に毒ガスを入れたと疑われ、林郁夫さんが嘘発見器をしたら、反応がでたそうです。

でも林さんの本に書いてあったけど、犯人じゃなくても反応してしまうことはあるそうです。それで嘘発見器で反応がでたことを浅原さんに報告すると、麻原さんは、ミラレパにどこのスパイか拷問して白状させろと命じたそうです。

それでミラレパが富田俊男さんを椅子にしばって、爪の間に針を刺したり、目をえぐりとりったりなど、ひどい拷問をしたあげく、殺してしまったそうです。

富田俊男さんは拷問の最中、「ミラレパ正悟師がマホームドラーの成就者ならやらないってわかるはずだ」と言っていたそうです。拷問をしたミラレパも後で「富田俊男は犯人じゃないと思う」と言っていたそうです。

私も、林さんの奥さんから嘘発見器かけられたことあるから、ちょっとぞっとしますね。もしあの時、間違って嘘発見器が反応しちゃっていたらと思うと。嘘発見器にかけられたとき「あなたは性欲の破戒をしましたか？」っていう質問もあってちょっとドキドキしました。

元サマナ

Σの2

2006.12.5着

宮刑だより。(マホームドラーについて)

①

「これはグルガ仕掛けたマホームドラーだ」というのは、よくオウムであられる。これについて私の見解を述べたい。

一. この言葉を使う心理を私の体験から述べると、「私はこの現実を受け入れることができない。私が信じている理想とは違うことが起きた。これは私を試そうとしているに違いない。だから私は信じていると思ひ込みたい」と。

二. この言葉を最初に使ったのは、麻原が衆議院選挙で惨敗した平成2年の初めだった。当時、私達は麻原をトップ当選させる為に、それこそ日夜働き続けた。私は渋谷区の1ブロックを任せられ、その地域の票の掘り起しに心を砕いていた。私の部下達は寒空の下、変な着ぐるみを着けたり、象の帽子を被ったりして、駅前立ち、有権者に朝7時から夜9時くらいまで毎日頭を下げてお願いした。雨が降ろうが雪が積ろうが関係なしにがんばった。初めは奇異な目で見られることにいたたまれなくなり、何度逃げ出したいと思ったかもしれない。彼女(女性も多い)らは私に訴えた。私も電話による支持をお願いしたが、9割以上が「ガチャ切り」で中には罵声を浴びせられたことも多々あった。「何でこんなことをやらなければならぬのか」と何度も思ったが、部下達は一生懸命にがんばっているのに、私が手を抜くわけにはいかなかった。ちやうどこの頃は調子を崩しており(オウムでは魔境に入ると言っていたが)、自分を思うようにコントロールできなかったのが辛さは倍加した。それでも、麻原をトップ当選させるべく、私と部下達、そして選挙活動に

②

かわった者達は一致団結して、毎日がんばった。

麻原は私達を激励する為だったのかもしれないが、「トップ当選しようだ」と言っていた。この言葉を信じて私達はがんばったが、開票の結果は最下位だった。これにはさすがにすごいショックを受けた。それまで神仙の化身であり、大徳の持ち主である麻原が当選しないはずはないと信じていたからだ。当選は確実であり、それをトップにするか否かが私達の課題であると考えていたのに、最下位の結果にこの現実を受け入れることができなかった。このギャップはあまりにも大きすぎた。この時、麻原も同様のことを感じていたのだと思う。選挙^{管理}委員会が票を入れ替えたと言ひ、掛りを付けたのは、麻原が判断していた為に、他のもっともな理由を考えていたからだった（他にも理由があると思う）。三。私は、「私達にとってありえない現実（認めたくない現実）」に対し、「これはグールの仕掛けるマール・ドラーだ」と思った。つまり、麻原を信じるか、現実を信じるかを決断しなければならなくなった時、麻原を信じる為にこの言葉を使ったのである。

もしこの時、「麻原を信じる」、「現実も信じる」という選択をしていたならば、以後は違っていたように思う。麻原は確かに何らかの神秘力を持っている。しかし、選挙で負けたように、その力は決して絶対ではない。また、私達の努力も、その方向性が間違っていたのかもしれない。このように考えていけば、麻原の言行もありのままに見ることもでき、自分達の置かれたポジションももっとはっきり認識していたと思う。

③

四。「マハー・ドラー」は麻原にもその報いがあるように思う。このために
言えば弟子達は麻原に異を唱え難くなる。麻原の側近達はみんな
YESマンだったが、これは弟子達が「グルの仕掛けるマハー・ドラー」と考
えてしまう為、NOと云えないのである。村井や上祐は大変な秀才だが、
彼らは麻原に自分達の考えを伝えることができなくなってしまった。彼ら
の頭脳を生かすならば、もっと創造的な活動や、社会に貢献できる
団体になれたかもしれないのに、それとは全く逆の団体となってしまった。
結局は高弟達の~~思考~~思考を停止させる言葉によって、オウムは^滅滅ん
でしまったと私は思う。

さらに、麻原が考えもないことを弟子が行うことも考えられる。多くの
事件は麻原が指示して実行された。私は実力部隊にいたので、そのこ
とははっきりと説明できる。ただ、私は^{麻原や上}指示されている現場には立ち会
っていない。井上や新実が麻原のロボットであり、麻原の下命令には動か
ないが、麻原の機嫌を取る為に麻原が指示していないことを実行し
た可能性は否定できない。麻原は法廷で弟子の暴走と主張している
が、ある場合は新実達が活手にやったこともあるのではないかと、最近
思うようになってきた。もっとも、麻原は永達を殺しをした後に確認を
取っている。弟子の暴走というのも一部であり、ほとんどは麻原の指示
の元で実行されている^{の間違い}間違いではない。

五。私が「マハー・ドラー」と思わなかったことについて述べる。諜報者に引
属した私は数々の犯罪活動に手を染めて行った。その度に、「これは本

④

常に救済活動的なものだから」と考えたものだ。そんな時は必ず、「これはマールムドローでありイデオロギイを式で示しているに違いない」と打ち消していた。ところが、殺人を実行した時からそのような考えを捨てた。麻原が言うことは間違いないと、心のどこかで決めてしまったからだ。この時から麻原の言行が、ほとんど非常に常識的であろうと、反社会的であろうと、麻原を疑うことはなくなった。その為「グルの仕掛けるマールムドロー」という考えは全く起さなかった。今から思うと、麻原を疑えず、「又殺し」という事実に向き合えなければならぬので、それを避ける為に、麻原を絶対視するようになったのだと思う。

六、サマサヤ信徒達は、麻原の奇行を「グルの仕掛けるマールムドロー」と思って自分を納得させようとしている。私は彼らのこの言葉を聞く度に、「彼らは本心では麻原を信じていない」とわかる。私もそうだったが、信じたいからこの言葉を口に出すのだ。もし、この言葉を口に出さなければ、その人は私と同じ破滅しかたない。行き着くところまで行ってしまて、ものすごい苦しみを経験することになると思う。そのようになる前に、もっと合理的な判断をする自由度を持つべきだ。そうすれば物事の事象も見えてくるに違いない。

オウムでは解脱のことを絶対自由と説く。人智の進歩と説く。しかし、この考えにこり固まり、偏見におとされて物事を見ているとしたら、それは解脱とは正反対のことだ。正反対のことをして、目標に到達することなど決ま^{ありえ}ない。

七、私はマールムドローという言葉が諸悪の根源だと考えている。この言葉を利用し、悪用することによって、オウムは麻原の制御を超えて^暴走していった。この言葉を使うから、現実をありのままに見ることができなくなり、思考

⑤

すらも停止させてしまう。麻原を絶対的に信じるというものは妄信以外の何
 もでもない。麻原の思いどおりに動くロボットだ。このように人達の集団
 を世間では、狂信的カルト集団だと思って差別したり、気持ち悪がったり
 する。そして、それが高じて警察等の権力によって潰して欲しいと思う様にな
 る。そのような世論が形成されれば、警察も監視の目を厳しくし、違法
 行為には有無を言わさぬ強制力を行使する。こうなると、オウムを信じる
 者は、国家権力に弾圧されたと被害者意識を持つ。より集団としての団
 結心はおろか強くなっていく。このような悪循環は誰の利益にもならない。
 ハ. ながら、「グルの仕掛け子マハーンドラード」という言葉はもう使わないように
 すべきだ。人にはいい面もあるが悪い面もある。これは時と場所や状況に
 よっても変化する。世の中にはたえず動き続けているのだから、思考停止になるよう
 な言葉を止めた^限り、物事の本质を捉えることはできないと思う。

それに、社会の中でこそ修行なのだから、もっと社会の中に出て行く。その中で
 自らの精神性を磨くことこそが大切なのではないかと思う。生きていると自
 体が修行であると認識を新たにしていってほしいものだ。

<http://www.cnet-sc.ne.jp/canarium/>

発行 カナリヤの会

〒242-0021

神奈川県大和市中央 2-1-15 パークロード大和ビル 5階

大和法律事務所 窓口 滝本太郎 気付

電話 046-263-0130 ファックス 046-263-0375 takitara@yha.att.ne.jp

横浜銀行大和支店 普通 1343078 カナリヤの会 滝本太郎